

# 14万年前の氷期 終わり方を解明

東大など

東京大学の横山祐典准教授らと英オックスフォード大学などは、14万年ほど前に起きた地球全体

の気温が下がる「氷期」が終わるメカニズムを明らかにした。サンゴなどに含まれる放射性元素を調べた。二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)による地球温暖化の解明に役立つという。氷期は約10万年間隔で起こる、地球全体の気温が下がる時期。前回は1万9千年前に、前々回は約14万年前にそれぞれ氷期が発生した。研究チームは世界中の海底から約14万年前のサンゴやプランクトンなどの死骸を採取。これらに含まれる放射性元素を調べ、当時の海水の高さや大気中のCO<sub>2</sub>濃度を推定した。その結果、南極付近の南大洋の気温が上がったことで氷期が終わり、その後徐々に海面が上昇。同時に大気中のCO<sub>2</sub>濃度が高まったと推定した。これまではCO<sub>2</sub>濃度が上がって気温や海面が上昇し、氷期が終わったと考えられていた。

日本経済新聞 2009年6月22日 朝刊